



素粒子物理学実験の現場から

第9回

大阪大学 花垣 和則

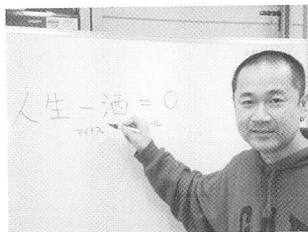
前回の記事の通り、私のような立場の人間がやっていることというのは、あまり物理学者っぽくないので、一般の方の興味を惹くものではないかもしれません。そこで、今回は、博士課程の学生あるいはポスドクなどの若手研究者の典型的な日々の様子を、自分の過去を振り返って、想像も交えて描いてみます。

朝、オフィスに到着してまずやることはメールのチェック。緊急の案件に関して返事を出し、すぐに返事を出せないが少し調べれば返事を出せるという場合は、それについての作業をまず行います。自分の個人の研究よりも、プロジェクト全体の進行を遅らせないようにそちらを優先させます。

メールチェックの後、私の場合、検出器の運転に使うソフトウェアの開発、改善作業、あるいは、物理解析に必要となる検出器の調整作業などを行います。その合間に、自分の仕事と関連のあるミーティングに出席。現状報告を行い、短期的・中長期的にどういう手順で作業を進めていくか、自分の中で具体的に明白になるように議論、相談しておきます。また、ミーティングで発表することが多いので、そのための資料作りも作業の合間を縫って行います。

そうこうしているうちに夕方になり、ミーティングやメールでの問い合わせが減ってきます。そこからが自分の時間。自分のやりたい物理解析に集中します。ルーチンワークならミーティングの合間や、空いている時間を利用するのですが、アイデアと集中力を必要とする物理解析のような作業は、私の場合、夜や休日など、他の作業に煩わされない時間帯に集中して行うようにしていました。

以上が典型的な日常で、実際にはこれに突発的なイベント(担当する検出器の調子が悪いと電話がかかってくるなど)が加わったり、時期によってはソフトウェア仕事ではなく検出器のテストに明け暮れる日々が続いたり、と、2、3年のスケールで見るとそれなりに変化があります。今振り返ってみると、学生からポスドクにかけては、検出器開発や物理解析に没頭していて、非常に楽しい時期でした。



著者紹介 花垣 和則(はながき かずのり)

大阪大学大学院理学研究科・准教授

CERNでLHC実験に参加